# 萬葉拾穗抄

十一之二

2354 2353 2352 2351



# 萬葉集巻第十一

## 古今相聞往来歌類上

### 旋頭歌　共十七首

柿本朝臣人麻呂

2351
新室壁草苅邇御座給根　草如依逢未通女者公随
にひむろのかべくさかりにいましたまはね　くさのごとよりあふをとめはきみがまにまに

2352
新室蹈静子之手玉鳴裳　玉如所照公乎内等白世
にひむろのふむしづけこがてだまならすも　たまのごとてりたるきみをうちにとまをせ

2353
長谷弓槻下吾隠在妻　赤根刺所光月夜邇人見點鴨
はつせのゆつきがしたにわがかくせるつま　あかねさしてれる月よに人みてんかも
一云　人見豆良牟可
ひと見てけんかも

2354
健男之念乱而隠在其妻　天地通雖光所顕目八方
ますらをのおもひみだれてかくせるそのつま　あめつちにとほりてるともあらはれめやも

古今相聞往来歌類上
往来の歌とハ、ふみかよハし寄こたへ返せる歌也
、むかし今のれいの往
来の歌類上下巻
にいれたり上とハ下に
にひむろのかべくさかりに
にひむろハ新き家也
みたしまはねハおはし
ますと見安云家を始
て作るときや壁をか
仙覚以為ことハ家の
萱屋の壁なれバ
草かりといへるなるべし
ましますとハ君をいはふなり
みぬむろのふむしづけこ　古点ハしづけこ　静子ハ女の名也
あるハ惟高親王の母を紀の静子といへり
さきり給こ是をなどにいひてかくいふ
へし此集第十二巻にも
再乃かぎりにこの
乃もハ此字をしたへる
この　彩点ハ仙覚
それとも云　おはせんそ
あさからさるゆへ
志川どハあつまりて
見安云　略注大意
西東　右二首往来緒言
をつせのゆつきか
此みの諸本をつか
この
宝家の
りかに
まつれ

夫支乃思多鶏備氏

一云ますらおのこころ

恵得よろこび吾念妹者早裳死耶

やくもんとわがみし妹をはやくもとわや

雖生吾迩應人云名國

いけりともわれにこと人のそもこに

豹錦級片叙牀落迩邦留

こまにしきしもとうちふかふるる

明夜志将来得云者取置待

あすのよをいかにかせんと云雲かくし

朝戸出公足結手濕平露原

あさとでのきみがあしゆひてぬらす露原

早起出下吾毛裳下潤念

そやくおきて出つゝわれもものすそぬれる

何為命本名来欲為

なにせんぞいのちをもとなにせんと

雖生吾念妹安不相

いけりともわれにおもふ妹やすくあはず

患緒吾雖念人月多社

いやこころ我にこそと人めおほみこそ

吹風有数々應相物

ふくかぜのいつもいつもこそ人目をも

人禰木通女兒居守山邊柄

しにこりなやのをとめこすてそるつかへ

朝々通公不来良

あさなくくかよひしきみこぬいろし

天雲在哉一棚橋何持行

あめにある一つ橋いかにそもらん

稱草妻所云足牡巌

わのをれはまりこといふ岩をうつて

闇木代欲云余

やましろのわがこころりこいおもひ

来背若子

くせのわがこころ

相狭丸　香欲云　闌木代　来背
あふさわに　わをほしといふ　やましろのくせ

是江の京にゆかりとこと[illegible]
あふさわにあるといふ棚橋
祇曰或人に云（仙覚か説）天にある日とつくれしこれ天の河の橋ニ云々又天の河の橋ニ云てその河
棚橋は手すりもなくよめれはさもこそしかりける[illegible]（詞林采葉ニ曰）天よりも
日ことにかくる[illegible]天川[illegible]棚橋は橋の[illegible]
[illegible]て棚のやうなる橋之事の[illegible]一棚橋[illegible]
[illegible]兼祇須も[illegible]
[illegible]書の[illegible]
山しろの　釈日本紀ニ若子謂夫也又曰稚子男子之通称也[illegible]
[illegible]書に[illegible]山城の[illegible]

## 古歌　五首

2363
岡前　多未足道乎　人莫通　在乍毛　公之来　曲道為
をかのさきたみたるみちをひとなかよひそ（イおほとかちと）ありつつもきみがきまさむよきみちにせむ

をかのさき[illegible]
[illegible]
[illegible]
万葉　要隅山[illegible]　信礼集[illegible]
[illegible]　散木集ニ　秋萩を[illegible]

2364
玉垂　小簾之寸鶏吉仁　入通来根　足乳根之　母我問者　風跡将申
たまたれのをすのすけきにいりかよひこね　たらちねのははがとはさばかぜとまをさむ

たまたれのをすの[illegible]
袖中抄[illegible]
万葉集云[illegible]

2365
内日左須　宮道尓相之　人妻姤　玉緒之　念乱而　宿夜四曽多寸
うちひさすみやぢにあひしひとづまゆゑにたまのをのおもひみだれてぬるよしぞおほき

[illegible]
風俗の[illegible]
[illegible]
万葉[illegible]古人[illegible]近代の[illegible]
うちひさす[illegible]

真十鏡 見之賀登念 妹 相 可聞
玉緒之絶有戀之繁 比者
海原乃路尓乗我吾戀居
大舟之由多尓 将有 人 兒由恵尓
おおふねのゆたのたゆたに
うかりくるかもかみのまにまに
思乃外 神中柳 下乃 清水乎 大舟乃 ゆたのたゆたに
浮居而 今香聞 ねもころ 戀乎 大船乃 ゆくへのしらに
おもひのほか かみのまにまに
うかりくるかも かみのまにまに
正述心緒 心緒 ココロヲ 述 ノベテ
ねもころに戀をのべてむ
うちねらえぬ夢の浮橋
ねもころに戀をのべてむ
うちねらえぬ夢の浮橋

正述心緒 一百四十九首

挿本朝臣人麻呂 四十七首

無為便事 者 来ム 為 國
須臾 可 寐 味 宿 不 寐 早敷 八四
人乃 可 寐 味 宿 不 寐 早敷 八四
公目 尚 欲 嘆
君乎 公矣 思 尓暁 来鴨
一云 君乎 公矣 念 尓暁 来鴨
戀死 耶 玉鉾
戀死 耶 玉鉾
路 行 人 事 告 無
路 行 人 事 告 無

2371 2372 2373 2374 2375 2376 2377 2378 2379

るさをこいんこゝろもし弘昭い神中おうようこゝ書こゝよさ君この心ん
こいもないこひもちねゝゆきん小事を告とこせて恋のまさ夏六恋
ちねゝそやかる情いまくんこそ等拾遺集下ることけてもる
まとをゝ心智ちこゝろよちへよおりへこんよいとぬ
ゝくく千重ふもこへ書こ
ゝくとりこいもさ
ゝもふあいそ
也ものさゝくく恋
ちさゝゝ
いうこそと恋ぬ叶六
叶とハのとハ助ゝ
ゝりゝみてハタを
ゝうけ岩ハ二人恋の
せんうゝるきゝゝや

ゝくしのこゝ恋やゝん
ゝくしのこれハ歌ま
童蒙抄玉さりふ会
をゝとゝ会ハゝまり
ゝそさいまるゝの
ゝれハ会の松ゝり
ゝさりゝと云ゝ
説心へふつのふ恋
わっのちふせん
斜恋ふふ温ゝる
ゝそゝおうゝ
ゝまゝゝゝ乃恐ハゝ
きくゝゝきゝゝ
ゝかせ人ふ会ゝき飲
令絶こハお会ゝ心
ゝゝゝゝきゝね

心　十遍　雖ニ念　人　不云
こゝろふハちへよおりへこんよいとぬ
吾戀儞　見　依　一鴨
わっこゝハゝをゝるゝとゝし
是量　戀　物　知　者
ゝくとりこひきゝおこゝゝよせハ
遠　可見　有　物
ゝふゝゝくゝのりゝるゝのと
何時　不ニ戀時　雖ニ不有
いつゝくこひねゝゝもいねゝも
夕方　枉ゝ　戀　無ニ之
ゝゝまゝくこゝゝゝゝ
是　耳　戀　度　玉　切
ゝくしのこゝひやわゝんきゝる

歳　經　管
いのちしきゝゝゝへよゝ
吾以後　所生　人　如ニ我
わっのちふうん人ゝゝ
戀　為　道　相　與　仞湯目
こゝするみちよゝりいあゝまゆめ
健　男　現　無ニ吾
ゝゝおうう心ゝし気いゝ
夜　畫　不云　戀　度
ゝるいゝゝすこひわれ
何　為　絶
まふせんよいのちつゞゝんまゝふ
不ニ戀　前　死去ぬれ物
こひせねさゝきゝりきゝおと
吉恵哉　不ニ来座　公　何　為
ゝゝやゝきゝぬまゝゝすゝり
不厭　吾　戀　作　居
うとゝすゝれいこひつゝん
見度　近　渡　乎　絶
これわこせいちゝきわゝをゝちゝ

今 我 來 座 戀 居
いまやわれきますとこひをるらんそ
早 數 我 誰 障 ㇾ ある 鴨 玉 鉾
もさやーーうちへてもまろかめ
路 見 遺 公 不ㇾ來 座
みちわすれ当てまろかきねば
公 目 見 欲 是 二 夜
きみのめをみまくほりして山ぢ越
千 歳 如 吾 戀 我
ちとせもかもまろこふるか
打 日 刺 宮 道 人 雖ㇾ滿 行
うちひさすみやちの人にみちゆけど
吾 念 公 正 一 人
わがおもふきみにひとりのみ

君が目見ねばくるしきを

世 中 ㇾ常 如 雖ㇾ念
よのなかはねのくうとはおもへども
半 手 不ㇾ忘 猶 戀 在
わすれかねつつなほこひにけり
我 勢 古 波 辛 座 還 來
わがせこはさきくいまそかへりきて
我 來 告 人 來 鴨
われきたけこんひとしるらむ
麁 玉 五 午 雖ㇾ經 吾 戀
あらたまのいつきへぬれどわがこひ
跡 無 戀 不ㇾ止
あともなきこひのやまぬなりけり

石 尚 行 應ㇾ通 健 男
いそかすゆきさへとほるますらをの
戀 云 事 後 悔 在
こひてふことのちはくやしも
日 俣 人 可 知 今 日
ひくれをしひとりぬるものは
如ㇾ千 歳 有 與 鴨
ちとせありこそあるらしもの

かし及すは悩そ
ひれたい人知ぬし
日乃中人のおさ狩よ
逢中中く待る夜
よちぬするわさも
高小笹然うて立
居するわさもそ狩
己妹が当てねい使を
しこさすそ
ねそよ可れこのよるう
八重わ云けりくひく
赤きそよ五百あ
ひく日もくきそ
ふり月をのりさ忍そくや寺しわさこけのりくちる心や類聚
小朱引をつけ伊いに和ぢり心消し感読けりくひくいねゆ
こいをて吉ますす 世不遠ね世そ死みんとく

立座 態 不知 雖念
ふちぬするわさもそ狩しねとそくやし
日乃中人のおさ狩よ 妹 間使 不告 不来
逢中中く待る夜 為玉 是夜黄明 朱引
よちぬするわさも 朝行公 待 苦
高小笹然うて立 戀 為死 為物 有
居するわさもそ狩 我身千遍 死 反
己妹が当てねい使を 玉響 昨夕 見 物
しこさすそ 今 朝 可戀 物
ねそよ可れこのよるう
八重わ云けりくひく
赤きそよ五百あ
ひく日もくきそ
ふり月をのりさ忍そくや寺しわさこけのりくちる心や類聚
小朱引をつけ伊いに和ぢり心消し感読けりくひくいねゆ
こいをて吉ますす 世不遠ね世そ死みんとく

八重わ云けりくひく 重素きの小笹そけさそや寺さ忍
赤きそよ五百あ 仙日今の寺八百さそ
ひく日もくきそ 中 不見有 従 相見
ふり月をのりさ忍そくや寺しわさこけのりくちる心や類聚 戀 念
小朱引をつけ伊いに和ぢり心消し感読けりくひくいねゆ 玉鉾 道 不行 為 有 者
こいをて吉ますす 世不遠ね世そ死みんとく 恻隠 此有 戀
吾身成 不相
朝影 玉垣
入風 所見 去 子故
行 不相 妹
天露霜 泊在我
玉坂 吾見 人 何有

ゆけどゝあねはゝ
えとりみるぬ、おま
ゑ哥とゝ云の心明
一日きくかわらん人ハ
いつまでもとゝて
まめらんこと
ゝきくとゝねハ
まれにけきこゝ人の
うきやそゝとさハ
くも勤もこねハ
さふりくふるぬ
さめくまにけきと

依 ヲ 以イテ 亦 一目見 ヒトメ ン
暫 ク 不見 戀 吾妹 ヲ
日日ヒヽカ 来 繁 事
年 切 及世 特イヽカ 定
公 依 繁 事
朱 引 泰 不經 雖ニ寐
心 累イ異 我 不思

一説ニ云ゝひくこゝ
ていふきこゝ
ゝくさゝきこゝ
ハいそゝ
ろゝこ利心
ひこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ
ゝきこゝ

伊田何 極 太甚 利心
及ビ失 念 戀
戀死 戀 哉我 妹
故 死 過 行
門 家 當 遠 見 相 依 為
妹 吾 戀 玉 久世 清 川原 身被 為
齋イハヒ 余 妹 無

思依見依物有
おもふりみよりそよりものはあるものを
一日聞ふそより忘
一日ひとへにうるわすれまし物念
垣廬鳴人雖云貊錦
かきほなるすいにはこまろとはいへこまろ
紕解閑公無
ひもときはらくるまてもなきさらし
貊錦紕解閑タ戸
こまにしきひもときあけて夕へとも
不知有余戀
しらぬよのうこひはくるしき
百積船潜納八古刺
もゝつみふねかくれいるやうらさひし
毋雖問其名不謂
ははもとふそのなはいはす

とはつきこれんみて落るく通ふへし今のよは心叩みよりきけれい
母いうへしもとくさてそれと問うもこをくしてそとなり
棄行基菩薩乃
すてゆきぼさつのみもゝ百八十石とりすくはゝ山寺をこゝやとうねを
と百石はし船とうふ仙境うすくはりきいてやとうねを
落るくいかゝこの境鑒母り帰途い母いる事とを約束しいう事
ふうと母をいてこいふ海みくのりれいうさてこいん詞ゝ古刺
うふと母をいてこいふ海みくのりれいうさてこいん詞ゝ古刺
て問こいふ世俗小物をうぶふこり名うは大り問こうもる事し出ひく事
人のすを母のをいりうふやもちあいうとこと人或云百積小百
人乃すを母のをいりうふやもちあいうとこと人或云百積小百
人と同しけ十丈乃母こゝこれれうと百石一ゆみや山寺そくさう乃みね
りきいてもの八うとさしてこもと八うとさしてうすと二月くん
まり振りまとそろい眉根刷鼻鳴級解待哉
祇回まりねりきとそろいまりねりきとそろいまりねりきとそろいんや
いとこさいふ人乃らもと何時見念いとしくんとなりふりまみ
き首君をりきて君戀浦絰居悔
きみこうとうふまとれいふやもと

我裏紐結羊徒
わりもてゆひをむすひてとこ
ふしも仙日眉根かき
きく毛つき人なもとめつゝ遊仙窟にもみなよみてうた人
乃うへにもおほくよまれたりけるをみるに時に下紐
そこともしられぬこひをするかなといふ歌をおもひ
よせて待んと侍るを 玉葉 遊仙窟云昨日眼皮瞤今朝良人見 おこた
きみまとはれ う まおほにす 毛を立てきにあひ
ともなふ 毛し我立ちおひ 毛りもすりもはてくる
ひもとくくやしそこひそくやしさとりもあへす
わすれそをやこそ
忘而念哉こゝろ
なりけんやとも心神を
うつ袖もをやこれいぜうさと
きろくこのそてを

璞之羊者竟抒敷白之
袖易ク子こひ忘而念哉
白細布袖小端見柄
是有戀吾為鴨
ロくるこひをもわまてするとし

つふいわつゝもこゝ
る立こいふ浪立の忘れ
わきもこふこひてする
立くせんこすれこわれ
れいそをもとをとをと
少なくかわりの下紐の
ひのかくるゝ解ハ君る立告
るへしをそいへりけり
ちてするこゝろ
こるゝことをくわり
立のてふ鮭てそ
世わするれいふひ
ちてす定そ毛
ちねの母ま降ハ

我妹戀無迩夢見
吾雖念不一所寐まてこひくすなみ夢そんと
故無吾裏紐令解
少なくふわりもこひもりけるを
人莫知及正逢
ひとりすかてふあ
戀事意遣不得出行者
こゝろのあくさめかねていてゆけそ
山川ハ不知來ケリ
山ちてすまりけるものを
作者未詳 此已下百二首或本在万の下の巻の末
足千根乃母ゝやか障良婆無用おちきころく
伊麻思毛吾毛事
いふもこゝろ
吾妹子之吾平送跡白布乃
わきもこかわれをとをとをくりこの

2527 2526 2525 2524 2523　　2522 2521 2520 2519



似むハゆしと云ハ日本紀に
滂乃字をよめりあなたハ
我をと云る也万葉并
さりハ云ハ母乃被擁
小宿くありし事
やよる(きこ云ハ丈夫と
寄る事成就せむ也
ねきもこ乃我をなてゝと
惜ツむつる併雅とも云也
かく山乃まきの板戸
金神社に石乃板
ハめせんよりや也事を云
切りこ乃ひとへを
藏を刈てせき云
うきつりと白てる

袂漬左右二哭四所念
そてひつまてになきしおもほゆ

2519
奥山之真木乃板戸平押開思恵也出来根後者何将為
おくやまのまきのいたとをおしひらきしゑやいてこねのちはなにせん

2520
苅薦能一重叫敷而紗眠友君共宿者冷雲梨
かりこものひとへをしきてさぬれともきみとしぬれはひやけくもなし

2521
垣幡丹頬經君叫率尓思出作嘆鶴鴨
かきつはたにほへるきみをいさゝめにおもひいてつゝなけきつるかも

2522
恨登思狭名磐在之者外耳見之心者雖念
うらみんとおもふせなはにありしかはよそのみそみしこゝろはおもへと

杜若八ゑうつくきを白ふ云へ八白てるも諷詞也率(イサヽメ)八すみやかにしおもひ注ス

うらみんとこゝろや
せなを支(シツト)之何りふいとふ何る時ふいひ或時せなが
我をよそにの子ゝろをとうらんと云りふこと円ハむつましきとある
うらやましきとかも
さにつらふいろ八
さにつらふハ色と云らん
諷詞すくなく云ね
こハ心の中ふかりくるゝ
言も云もすくしそ
すくともすくなくふ同
わかせこふとまあて
その心ハ心ハ事中
それかよふ事ふ名の兵ハ
言故ゆする也
ねもころにかへいかひ
心ニ乃字助字也
此吾心のせまりとと

2523
散頬相色者不出小文心中吾念名君
さにつらふいろにはいてすすくなくもこゝろのうちにわかおもはなくに

2524
吾背子尓直相者社名者立米事之通尓何其故
わかせこにたゝにあはゝこそなはたゝめことのかよひになにかそこゆへ

2525
懃片思為歟比者之吾情利乃生戸裳名寸
ねもころにかたもひすれかこのころのわかこゝろとのいけるともなき

2526
将待尓到者妹之懽跡咲儀乎徃而早見
まつらんにいたらはいもかうれしみとゑまんすかたをゆきてはやみん

2527
誰此乃吾屋戸来喚足千根乃
たれそこのわかやときよふたらちねの

母(ハヽ)を念(おも)ひ 哥(うた)に嘖(なげ)いて物(もの)
そうっさくれものおもふまれを
尤(もっとも) 不(ず)ト宿(しゅくせ) 夜者千夜毛有(よるはちよもあり) 我背子之(わがせこの)
さねぬよのちよもありこそ我(わ)せこの
思(おも)ひ可(べ)ト悔(くやま)ン者(じゃ) 不持(もたず)
おもひくやまじこころそうそう
衆人者路(ひとはみち) 毛四美三荷(もしみじか) 難往来(ゆきがたく)
いつひとちよみふりへいこと
吾待(わがまつ)妹之使(いもがつかひ) 不来鴨(こずかも)
まつやつらいこぬかもし
璞(あらたま)
之(の) すゝ(すず)ご竹垣(たけがき)編目従毛(あみめゆも)
ものすごうみたりきこのたけかきの
妹志(いもが) 垂見(たれみ) 者吾(は) 戀(こひ) 目八方(めやも)
もしみえましをこひめやも

この竹垣(たけがき)を奥儀(おくぎ)抄(しょう)云(いう)、男(おとこ)女(おんな)の中(なか)を知(しら)れざる事(こと)に譬(たと)ふる事(こと)あり、此(この)哥(うた)も彩色(さいしき)を施(ほどこ)さゞる竹垣(たけがき)と奥儀抄(おくぎしょう)心(こころ)仙覚(せんがく)抄(しょう)心(こころ)と和(わ)してすごう竹(たけ)の垣(かき)と心(こころ)得(え)めり、すごう竹(たけ)の垣(かき)と云(いう)は、節(ふし)の間(あひだ)遠(とほ)く疎(まば)らなる竹(たけ)の垣(かき)なり、すごうは疎(まば)らの意(こゝろ)なり、

わがせこの名(な)いふことのくちさがなさ
吾背子我共名不謂跡玉切
わがせこのなをいふことのくちさがなさ
命者棄(いのちはすて)
いのちはすてゝわたれどもわすれぬるかも
忘(わすれ)賜名(たまふな)
九(ここの)ヲ十(そじ)ト誰(たれ)将見(みむ)鴨黒玉乃(ぬばたまの)
ここのそたれかみむぬばたまの
我玄髪平靡而(わがくろかみをなびけて)拘(かき)ト居(ゐる)
わがくろかみをなびけてかきをらん
面志(おもし)何有(なにあり)之為物(のがために)喬(たかく)
たしなにあるのがためものうく
言者為金津継(いはゞなかつぎ)手志念者(てしおもへば)
いはゞなかつぎてしおもへば

詩曰(シヨリ)自伯(ジハク)之東首如飛蓬豈無膏沐誰適為容(セントカタチヲ)(ヤカンホソ)(フエレトモセン)(カタチヲ)(カヽラン)
なしこれいふ心(こゝろ)九(ここの)ヲ十(そじ)ト大(おほ)かるといふ事(こと)を
ことわりたる詩(し)なり、おもふ人(ひと)のために身(み)を
つくろはざるをいふ、

つぎ〳〵なりと八間断もなく〳〵なみ〳〵ならず人乃
すまゐとやは同じうきみぢ百首れ来よりつゝと
あひなりそねん人の
年のまさこと
こゝろをつくしねん人乃ゆへみだりの
年 緒長 言戀 将居
おもひそめてハ乃わすれ
わびぬ乃わすれ
ゆへ人のこゝろの
人世の人と云し
形乃わさいはひをや
るもあるねよ人
みいくこゝろそれ
しけよとさみを
まの玉ゐもとこゝろ
金に勢て妹をとこゝろ
たゝちねの野や

類聚抄此仙巧てるお
せすこゝろとゝろハゝや
也数子も知せす君を
思を指一ぐしよう
よりけ乃ハ君乃まゝと
ひとりぬとこしも打めや
妻家抄云ひやもり
こゝろ乃ゐる君をこゝろめやとゝ乃り本の哭ゐ独ぬ
こゝ森ハ打ちとれハ綾芭如来て結斗よるまて独ねて君を
ゆくらんこゝろもくらやゝとも義ハ同こゝろもあくそを本意のて
あや芭をまるまてよ玄能ね玉こゝろわゝ
乃ゐてゐちこせやいぬゝるやゝも類聚や可ゐもハ仙巧ハいるをとう
もしこゝろをゝ斗ゐ芭こゝ乃ハよゐちわゝるやいまや君待つゝよく我や
ちゝいさこゝふとゝ
ありわけ乃ゝをこゝろ

獨寝等茨ゝ乃ゝ 目八方綾席
ひとりぬとこしも打めや
緒介成 及 君平之 将待
相見者千歳八 去流 吾乎待鴨
なりにてゐちこせやいぬゝるやゝも
我哉然 念 待公 難介
おもひそめてハ乃わすれ
わびぬ乃わすれ
ゆへ人のこゝろの
人世の人と云し
形乃わさいはひをや
るもあるねよ人
みいくこゝろそれ
しけよとさみを
まの玉ゐもとこゝろ
金に勢て妹をとこゝろ
たゝちねの野や

振別之髪平短弥春草平
ありわけ乃ゝをこゝろ
髪介多久 盤 妹千師 曽於母布
ゐゝゝゝゝゝゝゝゝ

俳佪(やすらひて)往箕之里 介妹平置而
(ちとやすらひゆきみのさとにいもをおきて)
心空在土者蹈鞴
(こころそらにありてはふたたら)
若草乃新手枕平巻始而
(わかくさのにひたまくらをまきそめて)
夜我将聞二八十一不在國
(よるわがきかむふたやそひとりあらなくに)
吾戀之事毛語名草目六
(あがこひのこともかたりなくさめむ)
君之使乎待金千六
(きみがつかひをまつにちとせ)
窮者相縁毛無夢谷
(きはまれるものはあひよるもなくいめだに)
開無君戀介可死
(あけなくにきみがこひにかしなむ)

誰彼問者将答為便平無
(たそかれとといはばこたへむすべをなみ)
不答冊到者妹之歡三跡
(いなともいはずおもひきわれは)
君之使平遥鶴鴨
(きみがつかひをはるばるとつるかもの)
咲弁眉曳肝思鴨
(さきてまゆひきこころもへつつ)
如是許将戀物衣常不念者
(かくばかりこひむものそとつねのごと)
妹之手本平不纏夜裳有寸
(いもがてもとをまかずよもあらすも)
如是谷裳吾者戀南壬梓之
(かくばかりあれはこひなむなにしおはば)
君之使乎待也金千武
(きみがつかひをまつらくやすし)
妹戀浮嘆敷竹沼
(いもこふるうきなげきしけむ)
木枕而袖副
(こまくらにそでかたしきて)
通
(かよはせ)

2550 2551 2552 2553 2554 2555 2556

名何ありかくさうり　一云まくらさきにおきてねたりしを　而巻者寒
我ハこいなんするに　通　扣　母
その使ひをも待りわんするかとこゝろと思ひやるてんりやうな
我ハ旅なんとりもあへもみて思ひて
こゝろとわりなく　妻の枕こそとこの甚きをいふんとそ心一云
おもふをも思ひ枕乃ひやうそうるころろ
うちとくなりのそれ　立念居毛曽念紅之
紅乃あのもの重行　赤裳下引去之儀
心割をかも思ひ　平
ちるもみちあまり　念之餘者為便無
ぬひおもひわりいはせめ　出曽行之其門平見介
てあり門をふみ入　情者千遍敷及
よ出くまいとこ　雖念
こゝろおいちくふさく　使平将遣為便之不知久
ちくいおりき思ふ
ちくいきまりみとも

夢耳見　尚幾許戀　吾者
ゆめのこゝろくすこゝろ遠る我ハ　寤　面者面隠流物柄介
むりまいおもかれすることのうふ　見者益而如何有
うたくふくいおていうるん　對面者面隠流物柄介
繼而見巻能欲　公毳
けきくこゝろのうりき　且戸遣あさのとを無遣字
旦戸遣あさのとを無遣字　速イまりカ作連
ありとやと　莫開
おあけうあちさりめうるき　味澤相目之流君
今夜来座有ままセ
ここまいきませる　作ルヒニ者

玉笥之小簀之笥簾平往褐
ゝるれこれすとゆきかふ

しのばれ乃こまの
玉垂小簀垂簾童
ほどゆきからにハ行
て足かゞらに待つつあひ
こもれども君ハこまに逢
たらちね乃ははにや
母にゆよ制する親
まてし逢てこれハ
とハ親に告んこふ
わきまの為ならむ
うつくしと思へりけり
一よいあひて別る時
あしたるあひて思ひむすびし紐のとけしもとくるをこそハ衣
や君が我をうつくしとおもふやとこし紐のとくるハ人の恋するしるし
きのふ見てけふこそ　まのあたりてとふ斗こそあハねさしま
なれわびてし妹がけにもまた見まくほしきかなと

寐者不眠友　君者通速為
いねハねずとも　きみをかよハせ

2557
垂乳根乃母白者　公毛余毛
たらちねのはゝにまうさばきみもわれも
相鳥羽梨丹　年可経
あふとはなしにとしぞへぬべし

2558
愛等思篇来師　莫忘登
うつくしとおもへりけらし　わするなと
結之紐乃解楽念者
むすびしひものとくらくおもへハ

2559
昨日見而　今日社間　吾妹児之
きのふみて　けふこそへだて　わぎもこが
幾許継手　見巻欲毛
こゝだくつぎて　みまくほしきも

ひともなくふりにし
けさう人の恋死んとふ
わがよやるまやかく人め
をあさきもつふ行る我
をめぐまさるやハ君が
恋死ん諾ぬ千きを
めくみハ恵字慨也
今ことの志けきまも守て
人事乃茂き陰をま
もりてハわれハ逢と
も我が我上乃
あきれんことや
ことハ冰の以及あき也
里人乃こと”よせつま　わが妻に人もけさうし難云と志る是垣ハ障也
ことよう乃祝組人の　いひける事ハ此方　するも
ひとやもれきまかまかく　君が人目をかくれ帰るに志すひて我を

2560
人毛無　故郷尓有　人乎
ひともなくふりにしさとにあるひとを
愍久也　君之恋尓令死
めぐくや　きみがこひにしなせむ

2561
人事之繁　間守而　相十方
ひとごとのしげきまもりてあふとも
八反吾上尓　事之将繁
やへわがうへにことのしげけん

2562
里人之言縁妻乎　荒垣之
さとひとのことよせづまをあらがきの
外也吾将見　悪有名国
よそにやわれ見むにくゝあらなくに

2563
他眼守　君之随尓　余共尓
ひとめもるきみがまにまにわれさへに
夙興作　裳裾所霑
はやくおきつゝもすそぬれぬ

2564 2565 2566 2567 2568 2569 2570 2571 2572

安足乃能
きたに鳧雁
如此有
イなくさみて
いつくろひ
くろこと
我いもせ
と恨る
こころやは
ありこし
人もとゝ
やすらふ
基見安八
み沙汰せ
いまにとゞめ
見安云目
玉東をゑ
死ぬべれ
もゝくさ
奇も七
ひさけを
ねもこひ
拾遺集

不見人戀亦人之死為
情尤倍奉有君亦何物乎鴨
不云言此跡吾将竊食
面志太尓毛得為也登手握而水
雖宇奴不寒戀之
希将見君平見常友こもの花手之
まれにみんきみをうんこひしくての
執弖方之眉根掻礼
みるうれまゆねりきつま
人間守蘆垣越亦吾妹子乎
相見之柄二事曽尤多寸
あひみてのちのこひまさりけり
今谷毛日莫令乏不相見而
いまこたにもめうにともしたるこひめやういもにあはずして
将戀年月久家莫國イ真國ニ云
こひんとせさいけるかに
朝宿髪吾者不梳
愛つゝそ
うさねるまいけつゝうつくしさ
君之手枕觸義之恩尾
きみのてまくらふれしことのを
もゝくさもちくさ
奇も七ひさけをうゝ
ねもこひ拾遺集

亦人之死為
情尤倍奉有君亦何物乎鴨
不云言此跡吾将竊食
面志太尓毛得為也登手握而水
雖宇奴不寒戀之
希将見君平見常友こもの花手之
まれにみんきみをうんこひしくての
執弖方之眉根掻礼
みるうれまゆねりきつま

早去而何時君平相見等
をやゆきてうつつのきみをもあはんと
念之情今曽水慈少熟
なりいこころのうちのおもひぐさのしげる
面形之忘在者小豆鳴
ばたもやみのかりそめにもわすれていうちきらく
男士物屋戀作挿居
おのこらのやこいにけらんこ
言云君三三二田八酢四小九毛
ころよりふかくおもふきみがすくなきを
心中二我念羽奈九二
こころのうちにわがおもふもあるを
小豆奈九何杜言今更
なのちきるくるふかのまつこころはふ
小童言爲流老人二四千
わらはごとするものかな
乃杜言ことのちを人のうとにはそちらこころをそれいと文字を
いひてくいくひさしくもなりぬるをいかにと
相見而幾久毛不有爾
なのみやくいくひさしくもあらなくにいかにかくいひ
可聞
ならはさむこと
卯年月
同も待れぬ物を待つる
故小久くもあらなくに詩
一日不見如三秋と
ますらおこころ
大丈夫登念有
ますらおとおもへるわれを
吾平如是許
こひせもるかも
波小可伊乃在來
今戀
如是爲乍吾待印有
かくしもあらむとわれまつものを
世人皆乃常不在國
よのひとみなのつねかくしもあらぬものを
人事君玉梓之
いとことをきのふもいつれもいつれも
使志跡不遣
つかひやるすべもなくて
思名
おもひをるかも
大原故郷妹置
おほはらやふるさとにいもをおきて

ひとことをきけくて
人事なき板の母ある
ようやこまきてお妻。
をいるねとこまきと
おかつくりのよりみ
大系心城し亦亦
兼るふ妻母もて
まれしの心

久されいきみきます
まねよれをけきう
久きくれれぬ心
うひふうとさみし
神中物云うけふ日本紀り或彩と云或彩云うけひて
ねしよめるいれこきそしう彩ふとけすこいうり
それみよちゆり
母の兼つこう兼こ

吾猶金津夢 一所見乞
わきこねるいけゆかみてこう
久去者公来座跡待夜之
名凝衣今宿不勝為
あるうつゆしねてかる
不相思公者在良思思玉
うておものをおいあるぬそこの
夢不見受早宿跡
ゆみしそうけいてねま
石根踏在道柔行念跡
こねみよちゆりこうへこし
妹依者思金津毛
妹うちてをのいつし

人こころのきけきおもも
人事なき板をうふ
そて多そ初まる
六姉こやせんこと
ひきんのろそは
於遺集かいひ方五
ひきる日のうう
人こそ
きまこの松うこき
松つ松いれも雖く
ゆるへ
ゆりねされくこり
釣やきる我をまん
そてうこねなわり
るきはのうるみや
ゆめふいふいうし

給八等面忘南
はねるふこうおしわすれあん
戀死後何為吾命
こひちあんのちいけぜんわりの
生日社見幕欲為礼
いける日うこそるくうりすれ
數細扰動而宿不所寝
きまこうまうこまそしおいを
物念此夕急明鴨
るのふこよひをやあろんうも
不寐吾来跡可夜門不開
ゆう思わすくら美うさすて
何怜吾妹子待筒在
うされわまこまちつんの
夢吞何鴨不所見雖動見
ゆめふーるうもねこゆし
吾鴨迷戀介
わきうまふこひのきふ
名草漏心莫二如其氏耳
あくさもるこそいちふのみ

戀也 度 月 日 殊
こひやわたらん けさかは日のくたち
奥津浪敷 而 耳 八方戀度 ∞ 来ス
一云なきつ波敷 而 耳 八方戀度 ∞ 来ス
何 爲而 忘 物 吾妹子册
いかてわすれむ 物 吾妹子册
戀 益 跡 所忘 莫苦二
こひまされと 益 跡 所忘 莫苦二
遠 有 跡 公 衣 戀 流 玉 鉾 乃
とをくあれと 有 跡 公 衣 戀 流 玉 鉾 乃
里 人 皆 介 吾 戀 八方
さとひとみなり 介 吾 戀 八方
験 無 戀 毛 爲 暮 去 者
しるしなきこひを毛 爲 暮 去 者
人 之 手 枕 而 将 寐 故
人之手枕而将寐故
いとよわくねるらんこゆへな

百 世 下 千代下 生 有 目八方
ももよくちよもいきてあめやも
吾 念 妹平 置
吾念妹平置
夢 毛 吾者 不思 寸
現毛 吾者 不思 寸
振 有 公 介 此間 将 會 十羽
振有公介此間将會十羽
黒髪 白髪 左右 跡 結 大王
黒髪白髪左右跡結大王
心 平 今 解月 八方
心平今解月八方
心 平之 君 尓 奉 跡 念 有 者
心平之君尓奉跡念有者
縦 比来 者 戀 乍 平 将 有
縦比来者戀乍平将有
念 出而 哭 者 雖 泣 灼然
念出而哭者雖泣灼然
人之 可知 嘆 爲勿 謹
人之可知嘆爲勿謹

皆老乃髪を生しまで我心一つをゆるめて縒りあへんやと結と解と対え
こころそしきみわかるとす　我心を君に在て忘上ハおきく魂逢此ハおもみを
思ひあへりけんと見ゆ　恋つよのをハ晩と忘るも心あれハ心を君に在ると同
なりいて　ねまハあくきも　我なりをみり　むそ忘に帰るも我今に知るなと
しらまとの名ゆきなり
玉鉾乃道なゆ
く行ゆきての道
ひとめおほみつねに
人目おほみとて常に
恋ふゆるへと致きて
いつハ結えて恋ぬ
ほかんと致く道
しきたへ乃衣手
奥儀抄云しきたへ
とハひらく枕とこう
よむハ此事四ゆとあり　茅云しきたへハ以枕をゆいて只ぬるとある

2605
玉鉾之道去夫利尓不思　妹乎相見而戀比鴨
たまほこ乃みちゆきふりにおもはぬに
いもをあひみてこふるころかも

2606
人目多常如是耳志候者　何時吾不戀将有
ひとめおほみ常かくのみしさもらはゞ
いつれの時か我こひさらん

2607
敷細之衣手可礼天吾乎待登　在監子等者面影尓見
しきたへ乃ころもてかれて我を待と
あるらん子らはおもかけにみゆ

おもとしきたへといふやしきたへの道すらもおもかれ思ひなかと
もよめり男記之葉しきたへ乃衣手かれてとハ中のかれくにあり
て吾を待候なとみやこきらん妹か傍にこゆるきし吾を待と
あるらんとハ吾をまつとやきらんとぞ
いもか袖わかれし日
口ゆし
しろたへ乃袖ハおもひね
袖ハおもひねとハやぶれ
たる也しかるれおもひ
といふ也　妹か家道
を袖ふりあきまきこ
との家なきあかし也
袖ふるとハ人をまねき
いさむる心なり
うはたまの黒かみ
乱れ方なり乱ひれて

2608
妹之袖別之日従白細乃　衣片敷戀管曽寐留
いもか袖わかれし日よりしろたへ乃
ころもかたしきこひつゝそぬる

2609
白細之袖者間結奴我妹子我　家當乎不止振四二
しろたへ乃袖はまよひぬわきもこか
いへのあたりをやますふりしに

2610
夜干玉之吾黒髪乎引奴良思　亂而反戀度鴨
うはたまのわかくろ髪を引ぬらし
乱れてかへりこひわたるかも

2611
今更君之手枕巻宿米也
いまさらにきみかたまくらまきねめや

吾紐緒乃解者都追本名
白細布之袖而夜吾背子尓
吾戀落波止時裳無
一云眉根搔下伊布
夕卜尓毛占尓毛告有今夜谷
不来
眉根搔下言借見思有尓
去家人乎相見鶴鴨
眉根搔誰乎音拾見跡
一云眉根搔誰乎音拾見跡

思作氣長戀之妹尓
相鴨一云念有之妹之容儀乎
可之裳
今日見都流香裳

敷栲乃枕巻而妹與吾
寐夜者無而年曽経来
奥山之真木之板戸乎音速見
妹之當乃
足日木能山櫻戸平開置而
吾待君平誰留流

月夜好三妹二相跡直道柄
吾者雖来夜其深去来

寄物陳思（テクラ）諸本目録皆云三百二首然今所有二百八十二首也

柹本朝臣人麻呂

處女等平神振山水垣
久時由念来音等者

千早振神持在命
誰為長欲
上振神杉神成
石振神杉乃木乃神
戀我更鴨為
何名負（オホ）神幣奉者
吾念妹夢谷見
天地言名絶有
汝相事止

神社乃公まで祀られしも何れも我が神ならねど其ゆゑ
すゝめ祭るも仙覚が神とする意をもて解くべし
注云死せる人を神ともいひもすべし又人の子の活く
生ける妻子を神とする意ともよみたれどこゝと古兵を
いふなり神よねぎを餝りが為に成べし偽ばかりの神ぶ
りぞとなり 天地乃神乃 日見國同山隅
月乃照れる 今も昔も 一端乃月乃出立ち
愛しきさ妹隔有鴨
共に来て見し山乃端
里も広に 緑路者石ゐ踏平山も無鴨
我も妻子も 吾待公馬疲盡
わが待まくに 石根踏重成山雖不有
来座在 絹不聞誰故
きませるものを 絹能登香山
君目不見苦有
きませるものを 絹来座在山
君目不見暫有
仙曰原注沼山常陸
國也今ちの志理二
常陸乃東海道乃果なり 常陸乃多訶郡(タカ)柿藻(カキモ)山をよめり
風土記乃再ゐ今ちの志理乃山とよめり異註第一第二巻
志理くもこいそ訓迹 志麻と志理とは同音なれそいひなれ
いもし叫今のあはのごとく乃山可動在所いもし叫今とい
へる今の あはのごとく乃山ゆ汎出よひもうごくとやうに
志理乃山ゆ汎出よひもうごくとやうに 歩の渡ゐ
志理乃山ゆ再ゐ出てきつゝ鳴る事人もなれ
ど誰故乃志理乃山ぞとしれる人なし 玉葉は
てまる志を得ぞして悦ひる心 おひもうくこのごとくに
下二段ならん 或説は紐浣ゐ浣紗の紐を

のくにはそもきうこと山淺心をこう引坂峯の風吹り住男すこうす
やまものこりて
池をこりてそ吹
うまそてそと添物
をけつすみ心ひの
ねいその住思ひ男も
こをやまふ露こ
一二首いやをと
さうん風は心消
この川乃せの吉浪
吉きはいまわ
子ら涙こうく
の風は吹りのも
いふうこうす
ちやへうの
ちやへ集七番

山科 強田 山吹馬 雖在
吾 来古る 汝きを 念 不得
遠山 露 被 益遐
妹 月不見 吾 戀
是川 瀬々 數 浪布 々
妹 心 来 在 鴨
千早 人 宇治 度 速 瀬
不相 有 後
我儕 不相 子故 徒
早數 哉

らうね人字治の松引
やまき風ふ男迷の
吹をうこ一二首に序心
ふくあうすもほか
もおあおこと
そうきやーおねを
心消
はにの乃今ふこはうまき
序意りきのかう
さふふくうの娘め事
いかつし妻ふけ
類衆如此和彩号
あり和こあうこと
すうそのうそと和
妻いかつ同ー
もかつのの乃ちせおのと

是川 瀬 裳 襴 潤
このうれやうのすうぬうす
是川 水阿和多吉い逆纏 行 水
山にの乃今ふこさうおきゆくうにの
事 不 ふこと也ふさ思 始 為
ここうこ おいうめーう
鴨川 後瀬 靜 相
うもかのちやちつけみのちもふん
妹 者 我 雖不今
うまれよりうこすこし
言 出 忌忌
こそう生ていうこみやまうにの
當都 心 塞 耐 在
しまにこころをやきうかねー
水 上 如數書 吾食
もうのうよかすうこうき我今七
妹 相 受 日 鶴 鴨
いうこありんとうけいつるのと

又妻のちせい来の風心 玉来一二首いほもあんの風

説く心をもおもふなる妹を我なし女のある也一説妹の心は我をおもはんといふ
ところのよせあるとも或説は願ふ事をいふにてはなくなく事なからする風事也
こと心あらくいのちもなけれ是をもせんは是しく思ひて心は彼誓をもて
あるうつくしねかふところ上句は今のさうき事也ゆゑねかふは清くして
なき物也うけひは神代紀云日本紀に或は祈とも或は誓とも祈誓と
出てうけひとよめり古語拾遺云誓[ウケヒ]槽古語ニ宇氣布祢約誓之意
万葉ハ今恋死ねつきらきいのちも妹のおもひを誓約せるまさ

2434
ありそこえほかゆく
一二句は外心の枕詞也
あはれ恋死とも思ひ
てかの心は思はしとよ

荒磯越外往波乃外心
ありそこえほかゆくなみのほかこころ
吾者不思恋而死鞆
われはおもはしこひてしぬとも

2435
あふみのうみおきつ
是も一二句は知らずといはん
の枕詞也知らねとも
七日かゝるとも妹かりゆかんとよ

淡海々奥白浪雖不知
あふみのうみおきつしらなみしらねとも
妹所云七日越来
いもかりといはゝなぬかこえこん

2436
おほふねのかとりの
仙田香取下総なりおれと
これと今の香取は詠るは
近江にもおなし近江の
海の香取もあれとも集
七高嶋のかちの
満とよめる也こゝに高嶋
は大船なり是は略註
おきつもを云隠
舟は重ね詞也
め也恋ハ心に
人ことは言なり
人の口舌は言なり
あふ此妹を深くおもふ
しけるてひくは海と
いとん枕詞也
あふみのうみおきつ

大船香取海慍下
おほふねのかとりのうみにいかりおろし
何有人物不念有
いかなるひとかものおもはさらん

2437
奥藻隠障浪五百重浪
おきつもをかくさふなみのいほへなみ
千重敷々恋度鴨
ちへしくしくにこひわたるかも

2438
人事暫吾妹縄手引
人ことはしましそわきもつなてひく
従海益深念
うみよりまさりてふかくしそおもふ

2439
淡海奥嶋山奥儲
あふみのうみおきつしまやまおくまけて
吾念妹事繁
わかおもふいものことのしけけん

奥儒不安行止須臾
北也行止須臾而已
の語として別に立一
いおきみての飛語
訛称無根ゆえなきみ
いかりて心ざし
なりふこうんとて
あみそのうみなさく
序をく舟のうち
中に隠れいれ
てとうん飛語
それねのうち
童蒙抄云かれ
り東俗語に
さにあり
但童蒙抄云
おおけれ

迩江海奥榜舩重下
あみそのうみおきてくおおのうみ
藏くこのひてお之事待吾序
れてきそのことやまりれ
隠沼従妻戀者無し為
それぬうちふこれいすへとみ
妹名告忌ひき物矣
いもう名にけつ
大土狭雖盡世中
おおにちものこれいにくれと世中う
盡不得物在
ませぬうのそこなりもり
戀

童蒙抄云かれねい兵部
り東俗語に
さにあり
但童蒙抄云おおけれ

隠鹿澤泉在石根
こうれのさそいつる
念吾戀者
こやくふわうこみくい
通
自檀石邊山常石有
ましみうのれこまそうる
哉戀乍居
いのちうくやこいにくん
淡海阿自玉不知
りみそのうこうくすて
従應今益
こいせくりいいうのうれる

事にうてはさますにくくり
こうれのさいつる
さいうちみうることが別
斗り偽ごうれにそ
下お隠れもの心東
伝泉いわり伝心の
宝根を通ちわく如
我意の命をやと
ちうつうのい
祇曰ちくちう祇へ
祇祇心山かりね祇
あれいさきいとうさそうる命うくいうこうをうつそうめるを
ちくぬ命そくよめう命うくやを半往うかくこうみいう五年見
うみそのうみちうく 哥林良我云ちくいうるくの陰よりれうん
かくるをりみ住るみよおのそおおとおちくやそこ東山音一二のるし

（序）始めあけてよりまをして
（序）
白玉纏持従今
吾玉為知時谷
白玉従手纏不忘
念何畢
為玉開閑作貫緒
縛後相物
依
香山介雲位折曳於保保恵又
相見子等乎後戀牟鴨
雲間従狭徑月乃於保保恵又
相見子等乎見因鴨
天雲依胴遠雖不相
異手枕纏哉
吾
雲谷灼發意遣
見乍為及直相
春日楊山發雲
立座妹念

（序）
（序）

2454 2455 2456 2457

春日山雲座隠雖遠念公不念家
我故郷高山之嶺雖遮念兼不念妹
峯霧朝霧晩鴨羽黒髪山山草靡
烏玉之夜霜零敷益重念
大野小雨被木木本
時依来我念人

2458 2459 2460

朝霜消念仁
何此夜明鴨
吾背兒我濱行風殊急
急車益不相有
遠妹振仰而待恋乍見従出
是月面雲勿棚引

山葉追出月端
やまのはにさし出る月のそつくゝう
妹見鶴及戀
いもをそつゝにせこさまをそよ
我妹吾矣念者真鏡
わもこゝろれをおもひつゝまそ
照出月影所見来
てりいつる月のかけのごとね
久方天光月隠去
ひさかたの天つまてる月のかくれゆ
何名副妹偲
るかたもそつくゝしもしのひん
若月清
みつたきのさやかにてらし
見欲宇多手て比月
ねまくほりくうちきうつゝこのひち
我背兒亦吾戀居清吾屋戸之
わせこよりこいをれい我やとの

草依倍思浦乾来
くさにへにおもふらんうらかれくる
朝茅原小野印
あさちはらをのゝしるしめゆふそうを
何在公待
いつくありとこひくきみをいまそん
路邊去草深み百合之後
みちのへのゆりのちかてふ
妹命我知
いもかみことをわすれめや
潮気系葬交在草知草
みちとほみおもほえぬわれきのそも
人皆吾知裏念
ひとこそしるらめわれのうちこそおもへ
山苦苣白露重浦經
やまちさのさきにほゆるみうらふれて
心深吾戀不止
こゝろふかくわこひやまず

万葉集巻第十一終

知りてしをし雖知くさるくいひのうて人知れハさもいも結ひつきこし

2470 みなとにはしよみける　此みなとよ古点ハさなかりに和記たり八雲御抄さなかり

志(ミテ)万(スゲニ)こゑえしむ云犯九　佃日志りならハ湿風剌こゑ字し藺乃一名

也似莞而細堅宜為席ゝく　西東志りなまのまてハ人皆知ぬの諷詞

やまちさ乃白露言ゝ　仙田山ちさとハ山也四ゑ人ハ花さの事とも云

こ西東ゑ安ふハ山ちさハ何よりふ仰する也と一二句ハうかれてといりん

諷詞し露のこたれ也

みなとにねそふこすけ

小菅乃下に根のひる

2471 かくれぬハ能くとも

ひすてといりん諷詞よ

2472 能り思ひ乃て立て

とみてとし　イ潮(ミナトニ)

核(サネ)延(ハウ)とる又安云湊

よ根の延(ハウ)る菅也とゝ

やましろのいつみの

みなとにねそふこすけの　潮(イ)　根延(イハフ)　子菅　不竊隠　ぬすまはで

きみにこひつゝ　公　恋作　有不勝鴨　ありかてぬかも

やましろの　山代　泉小菅　凡浪　いつみのこすけなみ〳〵に

いもかこころを　妹心　吾不念　わかおもはなくに

みわたしの　見渡　三室山　石穂菅　みむろの山のいはほすけ

一云　三諸之山之　石小菅　みもろのやまのいはこすけ



2473 山城相楽(サカラ)郡泉川の事

なみ〳〵とハなみ〳〵なる事なるへし押

なへてハおもハすと也

類聚ニハ如此ぬ点を

2474 あるわれハおもはすとそ

みわたせハみむろの

三室山三諸山ミ同

2475 大和ニいふ菅ハ思ひ

ての諷詞也おほニ記ス

すかのね此思ひよ

みの人にハとくなとも

2476 やますけのみたれこひ

山菅ハ乱乃枕詞乱

恋ハ恋にみたれる也

2477 わかやとの軒の下草

志のひにわれそかたおもひをする　惻隠(イ志のゝ)吾　片念為

すかのねの志のひに君かむすひてし　菅根　惻隠君　結為

わかひものをゝとく人あらし　我紐緒　解人不有

やますけのみたれこひのみせさせつゝ　山菅　乱恋耳　令為乍

あはぬいもかもとしはへにつゝ　不相妹鴨　年経乍

わかやとののきのしたくさおひたれと　我屋戸　甍子太草　雖生

こひわすれくさ見れといまたおひす　恋忘草　見未生

うつたにもひえはあまたにありといへと　打田　稗数多　雖有

えらえしわれそよるひとりぬる　択為我　夜一人宿

あしひきのなにおふ山すけおしふせて　足引　名負山菅　押伏

心哉
うつせみもひとりねむらむ
うつせみのうつとはねとや
かりのねのよるさへ悲し
うつせみも秤は撰ばず
うつせみのうつは数多
なき撰ばずとも
我は哀しも妹なくと
何ひとれ名のる
山ずけとりまきもてれいも川の名の著しるしを序なく著に絡めるれを
あきかりそめぬや川辺 二安川河名の名乎めぬるをもこと但人使わ
二八秋柏皆拙 こころめぬや川名の称ふ注せるせるかこと
夏やくぬやいかにかもめる祇吟る秋の卵凡物遣 家長乃家長乃
家長乃 秋柏 秋の柏の去のくめのぬるそうそうきふそひ出人も逢りと云
さねつつのちをあり さねつつねこひわたりまよりあまりあるを

君公 結 不相 有哉
さみだれのふりつついます秋柏 潤和川邊 細竹目
あきかりそめぬるやいかにかもめる去のくめのうら
人 不勝
ひとりもあひこさみだれのふりつつ
不顧面 君
挟 葛 後も相 夢 耳
さねつつのちもなほりんこもめるものを
受 日 度 羊 絰 作
みだれとふりわたる
ほかるまんとうりん泪河のとろろ 哥心いとこころ
らめねおおりんと誓ことこれと忌まいつつおりすと欲く心 乞顔聚の
和古馬ちまもまんと妻中ゆきちりまりて等つ欲よいおりすと欲く心 露
ねとまんと妻中ゆきちりまりて等つ欲よいおりすと欲く心 露
みちのへのいちしの名
八重おいちしの名 羊
蹄 和名云董羊蹄
菜也和名ところ一云し
一三句いちしろくの流
涙哥心明 仙覚いちし
しのなのいちこの花と
つりおく勤古美也
おか野ろのれとろ
唐大の野のうこことも
ちく志めゆもこもはか
しかんはるさねをうんとせんろりねんねんれいねをもいと

路 邊 壹師 花 灼然古風
みちのへのいちしの名
人 皆知 我戀 儷
ひとみなしりぬわがこひは
人 知 尓家里 継 而之 念 者
一云ひとさとりおろかつまそてつつは
大 野 跡 歟 不知 印 結
おろのへれのとくすさめゆひて
有 不得 吾 省
あはともめやわりかうん
水 底 生 藻 打 靡
みなそこ生る藻の打靡
依 比日
こころをよせくこころのころ
戀
こひんはるさねをうんとせんろりねんねんれいねをもいと

一二百人打ちひさの飛迹打靡きいづ向きてふ
敷栲之衣手離而玉藻成
ころきふしてなれてふもすも
靡可宿檜和平待難ケ
かひきろめんわとやもちてよ
君不来者形見為等我二人
きみといはふみぜんこわまつ
檜木君平待出年一作ル来年ニ
うへ松乃木きみを待出ん
柚振可見限吾雖有
うてふるをふるきふりおこあれと
其松枝隠在
そもりうそりかくれふりふり
珍海濱邊小松根深
ちぬ乃うみのそもの小松根深
吾戀度人子姉
わりこひふるひとのこゆへ
一云ちぬの海乃血沼之海鹽干小松



ちぬ乃海津の
一二百い根ふめその浦
女子松原
一云ちぬの小松
千潟の松小松の根
あふしもの小松
あふしもの小松
ねはまおそれ
やまとをおれそへ
ふりのう
ふりのう
やまとい原の

根毋已呂介 戀屋度
ねもころこひやわたくん人
平山 兒故介
子松末 有篠叙波
我思妹 不相止看
礒上 立廻香瀧心哀
何深月 念始
橘本 我立下枝取
成哉君 問子等
天雲ホ 翼ナ附而飛鶴乃
多頴ヲ 思鴨君 不座者

ちかへるが云ごとくなるやうなるをいふ。謝乃心ハくとしハ謝ハ心乃
いさゝめなるかたなる歌とし、かくなる人を深くいふ。をもしろくやめる事なるべし
まちわぶる乃ことに　橋のことに我立つる時、かの枝をたわめ折る、此橘ハ
わが心と同じ。女子ハ忘れぬさまを人乃あはする事をなすとよむなるべし
あまくもにそよぐあつけて序とせねど、ゆつけてハ秘めを雲とびくる庭
こゝろくもいふなるもたゞいふことなり。君乃助なり
いもこふといねぬあさけに、をしとりのこゆりわたるハ
妹がこひしくいふなれ
をしどりハ鴛鴦此間を
こゆるを使とせしなり
王母が使に青雀なるか
天孫の使に雉名鶏のきじ
よりしこりて何思
おもふにしあまりにしかバ
鴨はふかくてぬく
足ぬれくるも鴨なるを諷

2491
妹戀　不寐朝明　男為鳥　従是此度　妹使
いもこふといねぬあさけにをしとりの
こゆりわたるハいもがつかひか

2492
念　餘者丹穂鳥　足沾来　人見鴨
おもふにしあまりにしかバにほどりの
あしぬれくるを人見けんかも

2493
高山　峯行宍　友衆　袖不振来　忘念勿
たか山のみねゆくしゝの友おほみ
そでふらずきぬをわするとおもふな

頭ならぶくなりぬ。我妹にしたがへて来る事を人やあやしむと云
たか山のみねゆくしゝ、たか山を一二句ハ友おほみといはん序也。鹿ハ友多き獣
なりて我独いふ事をなれてまゐりしことをいひてこゝにともなふと云
あれはするなし
おほぶねにまかぢしゞぬき
大船に梶しげくぬき
てかくこぎつゞくそのこと
こゝろにおもひて年々をかさね
その中乃年をこひかるハ
としをへて　或本ニハこゝろまる
と和なるを改め、我ハ大方
月をかけぬさハ八花の序也

2494
大船　真檝繁抜　榜間　極太戀　年在如何
おほぶねにまかぢしゞぬきこぐほども
こゝだくこひし年にあらばいかに

2495
足常　母養子　眉隠　隠在妹　見依鴨
たらちねのはゝがかふこのまゆごもり
こもれるいもをみるよしもがも

2496
肥人　額髪結在　染木綿　染心　我忘哉
こまびとのぬかがみゆへるしめゆふの
しみにしこゝろをわれわすれめや
一云　所忘目八方
わすられめやも

たらちねのはゝがかふこ
足常母ハ養子の諷也
切にこハかひこし揖眉で
とりとつけより上句ハ序也。母なくいひて深窓に守らる女を見んとするを也

うまひとのひさ 日本紀ニ君乃字ヲトウモヒトヨメリアヲオヨウモノ人
さびくことさイこそひとこそくる人まイこま人こゝろふうつく
ちを心まもし兄妹ニする麗人と注せりめり八重垣おほいそく人
こゝろの本肌人とかくるやもの泰乃氏人也神まにまかりつゝ
うと顰蹙ゆつる隙本綿こゝるちし兄妹ニそうめゆおいまの事也重
衣服きくにまのこゝの事中く髪ゆゝを初ことゆゝのこゝまニ注ることゝ
ちまし楽しこゝろ 早 人 名 負ヲヒの夜音 灼然
序ニまゝのゝ義ホ 吾名 謂ハヒ 儷 特
害ニまゝ日ハ并註ニ倍
ヲヒのまゝ
集人ハ犬の恵をも 神代巻ホスソリノミコトノイヒテ ノイトシ ラ 此テニ
ちる濃ニ注ル狗 日本紀曰火酢芹命苗裔諸隼人等至今不離天皇宮
ノキ ノ傍ニ代吠 狗而奉事者也 この集ニ多ほのゝまゝ集人曰凡
檜之傍代吠 元日又即位及蕃客入朝等儀左右群臣初入 テ 今来隼人殿吠聲 名ヲ 雖喜式 集人曰凡
元日又即位及蕃客入朝等儀左右群臣初入今来隼人殿吠聲三節畢註
この隼人の犬のこゝをゝ名ホ 拙二白ハいちゝろく
とゝいへん泥ゝなきやホ我名を告く書と教ゝんこと イ 吾名謂とれる

あをいつゝと和スさなゝゝ義しゝゝくねや
ほくまゝこゝろゝ
詞林采葉云つゝまこ
こゝろ ハ釧とカこゝろ
ゝすあすにみ乃
あるし釧ニゝおホ
仰ゝ玉葉哥心明ニ
わまもこゝひ流れ
ほくまこゝろゝ
ゝれ名とゝゝ外
泥也ホ三註哥心ゝ
なさゝくひむホ
朝月日ハ向とゝん枕
詞むゝふたびゝ二ハ
兄妄ゝ楼の髪けゞる
時神おひゝホ枕こゝと

釧 刀 諸及 利 足のゝゝ 躙ゝ
死 依 公
度 釧 カ
我妹 戀
死 公
念
惜 不レ得
名 乃 知 けゝくもおゝ
朝ゝ月 日 向 黄楊櫛 雖著
何然 公 見 不飽
里 遠省 浦 經 真 鏡
床 重 不レ去ゝ 夢 賢見 與
真 鏡 手 取 以 朝 朝

一百いかゞあれとこい
ふ人序し月日ゆきこも
君をこそおもはめやもと
さることをみうへなれ
逼ゐをてうれ
これい床上さうぬ
かゆくらしよりまさ
浅い床上さうすの汎
汎浅い君をとるさぬきのあれこ或説ニまた接ぬえ北濕
まうかみてゐるカ上句いこれらもこいそん序し読ゐねこれこ
ゆさいいりのへさうぬ
あれごこい松をさてゐ汎夕ゐ床上をさ
らてゐみ松いをくこいつこいつう叶松のうまるこ君ういうくるりて約
えりうこと諸本如此但類聚ニハさいうまきをおていくるまきを
古本多くりりるもし射然こ雖然こ仰う池主をきみこさる
や待固こ待固こかりうやの事ゆもゆ仮へれこ今ニ仮ニ法本ニ迎
こまでわのこひこぐれ解ゐい私るおあれい迎私の汎汎ゆまご

雖見君飽事無
夕去床重不去黄楊櫛
射然うされも油。主待
解衣癒亂乍浮
沙生吾癒度鴨
ゆゆこなすわうこひうるう

ちすこいねふおうやうや迎うれうれねもふ知迎房と
ゆゆ
いうさうひゆさて
ひゆくゆうさすこと
うをうさうくる
こねをこうれを君
う迎ゆをゆうて
あーゆふ迎ゆく
のち迎のうきめう
あふを駆く心國ニ
こと一あれやうの
詞林集巣ニこと句
こいゆ見安ニこと
これやうちゃうとい人乃汎れおうるをこと事ふ物てゆき
ゆ人乃汎をゆてこ表肉をとうゆふ古ふうくいへ妹ふおうんくく
うゆこれちゆき名ゆきうるこいをと辻ニすくゆも

梓弓引不許有者
此有癒不相。。
ふるこひうまあをさうまうを
事靈八十衢夕占問
ことうれやうのちうにゆけふ
占正謂せよ妹たゞ為相依おうんた
うものこいうたひうん
玉鉾路往占占相
うまをこうみちものまうふうまる
妹逢我謂イたけてき
いとふおうんこおまつるいひたる